連載 ロシア政治を知る・その34

オリンピックと政権

笹岡　伸矢

この原稿は2014年2月に書かれていますが、まさに今、ソチで冬季オリンピック（以下、五輪）が開かれています。この原稿が出るころ、結果はおおかた出ていることと思います。並々ならぬ意気込みで、この五輪を成功させたいと考えているのが、誰あろうプーチン大統領であると思います。まさに、彼にとっては、五輪は自らの威信だけでなく、今後の政権維持をかけた戦いであるといえます。はたしてプーチンは、五輪後も指導者としてロシアに君臨できるのでしょうか。過去、五輪は幾度となくおこなわれてきましたが、そのあと、各国の当時の指導者はどのような運命をたどったのでしょうか。今回はデータで確認してみたいと思います。ということで、今回は五輪開催国の指導者の話が中心で、直接ロシアの話ではありませんが、ロシアおよびプーチンの今後を占う意味で読んでいただければと思います。

第二次世界大戦後の五輪は、夏季と冬季それぞれ17回（ソチを除く）、合計34回おこなわれています。ということは、当時の指導者も34人いたということになります。彼ら彼女らが五輪終了からどれだけ長く政権についていたかをみてみましょう。平均は約3年（36カ月）でした。最長はオーストラリア（1956年夏季・メルボルン）のメンジーズ首相で五輪後、約9年1カ月（109カ月）在任しました。最短は日本（1964年夏季・東京）の池田勇人首相で、約1カ月後に辞任しています。長短ありますが、平均を考えると、プーチンも3年は安泰かもしれません。

しかし、もう少し条件を加えて見てみないといけません。1つ目は民主的な国かどうかです。過去の五輪では、社会主義国（ソ連、ユーゴスラヴィア、中国）と一党支配下のメキシコという民主的とはいえなかった国でも実施されています。それぞれ五輪後の政権の長さについて平均値を出してみると、民主国では約37カ月（3年1カ月）であるのに対し、非民主国では約27カ月（2年3カ月）となっています。民主国では選挙があるのに対し、非民主国では自由選挙がないため、指導者は長く居続けるという印象を持つかもしれませんが、実はそうではないことが分かります。現在のロシアは民主的とも非民主的ともいわれていますので、なかなか予想はしづらい部分があります。

2つ目は政治制度がどうなっているのかです。大統領が政治指導者である大統領制の場合、任期が決められているので、政権の座に長く就くことは難しいのに対して、首相が政治指導者である議院内閣制の場合、選挙で勝ち続ければ長期政権を築くことができます。一般的には、議院内閣制下の首相のほうが、大統領制下の大統領よりも在任期間が長い人も多い半面、政権の都合で人の入れ替えが容易なので在任期間が短い人も多く、ばらつきがあるとされています。結果ですが、それぞれの平均値は、大統領制が約37カ月（3年1カ月）であるのに対し、議院内閣制が約38カ月（3年2カ月）とほとんど変わらない結果になりました。この違いは、いつ五輪がおこなわれるかというタイミングの問題もあるので、偶然の要素も大きいといえます。

現状に鑑みれば、プーチンは3年だけでなく、残りの任期（2018年まで）を全うすることは固そうな感じですが、過去のデータからは連続2期目を保証してくれる結果ではありませんでした。ちなみに、アメリカでは1期目に五輪を迎えた大統領が再選に成功したか否かをみると、3勝（レーガン（1984年夏季・ロサンゼルス）、クリントン（1996年夏季・アトランタ）、ブッシュJr.（2002年冬季・ソルトレイクシティ））－1敗（カーター（1980年冬季・レークプラシッド））となっています。大統領にとって2期目の選挙は有利であることは確かですので、五輪を成功させられればプーチン再選の可能性は大いに高まると予想されます。